農林業知らない学生に関心を！

早大の「農山村体験実習」が人気講座

「支え合う社会」学ぶ

早稲田大学（鎌田薫総長）では、学部の隔たりなく受講できる共通科目講座「農山村体験実習～農林業問題入門～」を開設している。在学生の約7割を関東出身の学生が占める中、農山村での農作業や農家との交流体験は、学生が農業や食料問題に関心を抱く格好の契機。履修した学生が農村を行き来したり、〝農的生活〟の実現を目指したグループを組織するなど、講座を起点に都市農村交流の構図が描かれている。

インストラクターの指導のもと、田植えに挑む学生たち（『書を持って農村へ行こう』より）

講座は、「日本の農山村・農林業の状況を総合的かつ実態的に学習する」ことを目的に7年前に始まった。①農山村での実習（農作業体験、聞き取り調査、地元農家との交流・意見交換など）②実習に関連した日本農業や農山村に関する講義（座学）③実習に向けた事前の実習地別グループ学習④夏の実習後のグループ別報告（プレゼンテーション）――で構成されている。単に「農作業体験」にとどまらず、総合的に農山村の状況などを学ぶことが特徴だ。定員は50人だが、口コミで評判が広がり、毎年抽選になるほどの人気講座になっている。

実習地が第2のふるさとに

農山村体験実習1期生が「学生NPO農楽塾」を組織。「早稲〝田〟になぜ田んぼがないんだ？」の一言から学内に水田を拓いた。毎年稲が育てられている（『書を持って農村へ行こう』より）

「実習地が第2の故郷になり、卒業後も訪れるなど、つながりをずっと保っています」と話すのは、講座担当の堀口健治教授。閉鎖的な都会の生活環境とは異なり、学生を農家に泊め、家族同様に迎え入れる農村社会の姿に、学生は何より驚く。だが、今なお農山村に残るそうした〝相互扶助の精神〟など、「互いに支え合う社会の仕組み」を理解することも、講座の大きな目的なのだ。

このうち「①農山村での実習」は、履修者全員が新潟県十日町市松代で、田植えと稲刈りを1泊2日で実習。また、班別夏季実習が3泊4日程度で行われる。学生は、①岩手県田野畑村②山形県高畠町③同寒河江市④福井県坂井市――の中から選び、実習の成果をプレゼンテーションする。

学生のほとんどが農作業は初体験。慣れない作業にも真剣かつ楽しみながら取り組み、ほかでは味わえない疲労感と達成感に浸る。農家との意見交換会も開かれ、いろいろな議論が交わされる。地域のこと、農業のことを真剣に考え、自分の思いを発することの時間が、引率者にとって最も楽しい驚きの瞬間となっている。

堀口教授は「専門とは離れるが、座学では学べない生き方に関わることを全身で学ぶことが出来る」と講座の意義を強調する。

7年の貴重な経験を本に

こうした早稲田大学の7年に及ぶ「農山村体験実習」の貴重な経験が、都市と農村の往還とその仕組み、成果などに整理され、このほど1冊の本として出版された＝写真左。大学や学生との交流で地域活性化を目指す地方自治体や、農村との交流科目を設置したいと考える教育機関、農山村に興味を持つ学生など、農山村地域に関心を持つ方々はぜひ読んでみるとよい。

『書を持って農村へ行こう―早稲田発・農山村体験実習のすすめ』㈱早稲田大学出版部＝☎03・3203・1551、1800円（本体）